

女子学生の体育授業に関する一考察

渡部, 近志 / HIRAI, Toshiyuki / WATABE, Chikashi / 平井,
敏幸

(出版者 / Publisher)

法政大学体育研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The research of physical education and sports, Hosei University / 法政大
学体育研究センター紀要

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

21

(発行年 / Year)

2002-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005069>

女子学生の体育授業に関する一考察

A Consideration on physical education for female students.

渡 部 近 志 (法 政 大 学)

C.Watabe

平 井 敏 幸 (法 政 大 学)

T.Hirai

キーワード： 女子大生 スポーツへの関心 心身の自己認識感 体育・スポーツへの関心

key words : Female students. Interest in sports. Self evaluation of mind and body.

Expectation of physical Education and sports.

1 緒 言

大学設置基準の大綱化（1991）、中央教育審議会答申以後大学における正課体育授業の取り扱い、各大学の創意、工夫に委ねられ大幅な、また多様な改革に取り組み今日にいたっているのが現状である。本学部においても2001年度国際経済学科の立ち上げを契機として、学生の多様なニーズに応えるべく学部カリキュラムの見直しと改革に取り組みを果たした。そうした一連の中で、正課体育授業においても例外なく改革に取り組み、1年次必修スポーツ総合通年2単位、2年時以降自由選択セメスター制（通年履修あるいは複数年半期履修）スポーツ種目2単位での授業体系を試みることになった。とはいえ、無防備にそうした改革への取り組みは体育授業の存在や価値に対して大きな議論を巻き起こすことも十分考えられる。そこで、旧カリキュラム正課体育授業を、1年次に受講していた現2年生を対象にアンケート調査を実施した。すなわち、自由選択型体育・スポーツ授業の選択履修の希望予備調査を実施した。その結果、多くの支持、希望（75.7%）が見うけられた。この予備調査をもとに新カリキュラムのスタートとなった。歴史的な正課体育授業の改革は、多くの学生に支持されることは無論のことではあるが、とくに、経済学部女子学生からの支持を受けなければならないと考える。なぜならば、スポーツにおける女性の活躍やその役割、また、生涯スポーツへの理解は女性を抜きにしては考えられないからである。しかし、本報告ではスポーツとジェンダー論を考察することが主目的ではない。とはいえ、今日のスポーツへの関心、スポーツへの女性の進出、さらにポピュラーなスポーツ、カルチャーとしてのスポーツ、スポーツの理解と実践の機会は性差を問わず幅広く支持を受ける時代となっている。大学体育に与えられた教育目標は、単にスポーツの実践の機会に提供にとどまらず、生涯にわたってスポーツを実践し、楽しむ心を育むとも考えられる。そうした教育目標を実践していく為には、一方的にスポーツプログラムを提供することではなく、スポーツの実施者、実施希望者の意

識構造を理解し、多様なニーズに対応したプログラムの提供を心がけていかなければならないと考えるからである。

そこで、本研究の目的は、新カリキュラムの必修正課体育・スポーツ授業を受講している女子学生に対して、スポーツへの関心とスポーツ（クラブ）経験、さらに心身の自己認識感と体育・スポーツ授業との関連について、さらに、体育・スポーツ授業への期待感とその内容についても調査を実施し、それらの結果から得られた観測値を検討材料として、今後の授業運営の基礎的資料を得ようとした。

2 方 法

(1) 調査期間および調査方法

2001年6月下旬、教室内で調査紙を配布、その場で無記名にて回答、回収するといった集合調査法にて実施した。

(2) 調査対象

1年次必修正課体育・スポーツ総合を履修している、法政大学経済学部的女子学生4クラス、欠席者を除く184名を対象とした。

(3) 調査用紙の作成

調査用紙の作成にあたっては、三つの視点を持って作成にあたった。

- ① 女子学生のスポーツへの関心と小学校、中学校、高校でのスポーツの経験との関連について。
- ② スポーツへの関心と生涯スポーツと体育・スポーツ授業への期待との関連、そして、その期待する内容について。
- ③ 大学入学後の心身の自己認識感と体育・スポーツ授業との関連についてであった。

回答形式は、「1－ある（思う）、2－ない（思わない）、3－どちらでもない（どちらとも思わない）」3段階評定尺度から1つの回答を選択する多項選択回答方式を用いた。ただし、②の調査項目については、体育・スポーツ授業への期待感の回答形式は、①③の同様な方法で行ってもらい、その期待する内容については、「1－楽しさ、2－触れ合い、3－体力向上、4－技術向上、5－新しいスポーツ体験、6－その他」の中から複数選択回答形式によって回答を得た。

(4) データの解析

回答を得られた調査表から、質問項目単位に単純集計（度数とその割合）を行い表の作成を

行った。さらに、スポーツへの関心と生涯スポーツおよび体育・スポーツ授業への期待、そして体育・スポーツ授業と運動不足感・ストレス感・体力不足感・器用さ感・友人仲間づくり感・生涯スポーツ感など、それぞれの関連性をみるために2×2のクロス表を作成した。解析は χ^2 検定（独立性）によって人数の偏りを解析した。そして、さらに有意差の認められた項目については ϕ 係数を算出し連関の強さをみた。なお、検定計算にはエクセル統計を使用した。

3 結果および考察

(1) スポーツへの関心とスポーツの経験

1) スポーツへの関心

表一1は、各質問項目を度数と割合(%)を示したものである。ここでは、まず「スポーツへの関心」についての回答を考察する。表1に示すように「スポーツへの関心」に「ある」と回答した学生は114件(78.2%)で、「ない」と回答した学生は5件(2.7%)で、「どちらでもない」と回答した学生は35件(19.0%)であった。以上の結果から本調査の対象となった学生の約8割はスポーツに関心があることが明らかになった。

わが国に限らずスポーツの世界的な広がりや、単にスポーツをするだけに限らず、今日では様々な形でスポーツを鑑賞する機会に恵まれてきた。特にテレビの普及は、みるスポーツマンやスポーツファンの拡大に大きな影響を及ぼしてきた。それは、世代や性差の枠を超えリアルタイムに送信されてくる臨場感はテレビを見るものを映像に引き込ませた。そうした、今日のスポーツを取り巻く環境は「するスポーツ」とともに「みるスポーツ」もまた、スポーツに関心をもつ因子の重要なファクターとなり得たのである。佐伯¹⁾は、「スポーツは、行うスポーツに従属していた憂さ晴らし的な位置づけを越え、新しいステージに向け成長し始めている。それこそ、行うスポーツと並ぶ新しいスポーツの享授の一つのスタイル、つまりスポーツ文化としてのみるスポーツへの発展である」と述べている。つまり、今日の時代背景を考えれば、必ずしもスポーツを経験するものがスポーツへの関心を高める因子ではないと考えるが、また一方、わが国におけるスポーツの発展形態は学校教育に大きな影響を受けてきた。スポーツへの体験、すなわち、するスポーツの関心や興味、さらに喜びなど、スポーツを通じて子供たちの社会化にも大きな影響や効果をもたらしてきた、正課体育、課外スポーツ活動の果たしてきた役割や歴史的事実をもみ逃すことが出来ない。本調査の対象となった学生も小・中・高校といった学校での環境下で「見るスポーツ」及び「やるスポーツ」と言ったスポーツ体験を育んできたことが予測される。そのため、スポーツへの関心が高まっていると考えられ、本調査で得られた「スポーツへの関心」の観測地が78.2%であったことは妥当な傾向ではないかと考えられる。そして、本調査から「みるスポーツ」にせよ「するスポーツ」にせよ、スポーツは学生達の日常生活の中に深い関わり合いを示していることが示唆された。

表— 1 回答度数とその割合 (%)

n=184

質問項目 / 回答内容	ある(思う)	ない(思わない)	どちらでもない
1 スポーツへの関心	144 (78.2)	5 (2.7)	35 (19.0)
2 スポーツクラブ経験 (小学校)	122 (66.3)	50 (27.2)	12 (6.5)
3 スポーツクラブ経験 (中学校)	129 (70.1)	51 (27.7)	4 (2.2)
4 スポーツクラブ経験 (高校)	91 (49.5)	90 (48.4)	3 (1.6)
5 運動不足感	155 (84.2)	16 (8.7)	13 (7.1)(学外スポーツクラブ)
6 体育授業は運動不足を補うか	100 (54.4)	32 (17.4)	52 (28.3)(学外スポーツクラブ)
7 日常のストレス感	85 (46.2)	47 (25.5)	52 (28.3)(学外スポーツクラブ)
8 体育授業は気分転換になりますか	122 (66.3)	20 (10.9)	42 (22.8)
9 体力不足感	164 (89.1)	5 (2.7)	15 (8.2)
10 体育授業は体力不足を補うか	57 (31.0)	53 (28.8)	74 (40.2)
11 運動・スポーツの器用感	51 (27.7)	78 (42.4)	55 (29.9)
12 体育授業は技術向上になりますか	68 (37.0)	61 (33.2)	55 (29.9)
13 友人仲間づくりの苦手感	27 (14.7)	99 (53.8)	58 (31.5)
14 体育授業は友人づくりに役立と思いますか	89 (48.4)	31 (16.9)	64 (34.8)
15 生涯スポーツ感	144 (78.3)	5 (2.7)	35 (19.0)
16 体育授業は生涯スポーツに役立つか	77 (41.9)	36 (19.6)	71 (38.6)
17 体育授業に期待することがあります	*166 (90.2)	11 (6.0)	7 (3.8)
*期待する内容 (回答度数、延べ回答度数とその割合(%))			
1. 楽しさ	152/362	41.0%	
2. ふれあい	55/362	15.2%	
3. 体力向上	46/362	12.7%	
4. 技術向上	14/362	3.9%	
5. 新しいスポーツ体験	95/362	26.2%	
6. その他	0/362		

2) 小学校、中学校、高校でのスポーツ経験

さて、スポーツへの関心が高まる要因として学校でのスポーツ経験が予測された。そこで、つぎに、各学齢期でのスポーツの経験について検討を進めることにした。なぜならば、わが国では、学校というフォーマル集団でのスポーツとの出会いや関わりが大きな意味を持ってきたからである。嘉戸ら²⁾³⁾⁴⁾の報告では、「学齢期にある児童、生徒には学校や仲間は大きな存在である。なかでもスポーツや運動ができる・できないというのは、その仲間づくりに影響を与える。中学校以降学校では、部活動が彼らの生活に影響力を及ぼす。現在スポーツクラブには所属していないが、スポーツが好きな高校生は、中学時代までスポーツクラブに所属していた経験を有する」と述べている。つまり、学校生活とスポーツ、スポーツと仲間づくり、そしてスポーツの趣向などが学齢期のスポーツ経験によって社会化に影響を及ぼして

いるかを報告している。また、大橋⁶⁾は、課外運動部の現状について「小学校ではスポーツの楽しさを味わい、中学一年のときに75%が胸を膨らませて運動部に入るのに、学年が進むにつれ次第に減少して、高校では30%になってしまうことである」と報告している。つまり、大橋の報告を踏まえると、学齢の進行と共に減少するスポーツ活動やスポーツの離脱傾向に対して、大学体育・スポーツ授業は「スポーツへの再参加」として重要な意義付けがあると考えられる。

本調査においても、大橋の報告と同様な傾向を示していた。すなわち、表1に示すように、小学校では66.3%が学校でのスポーツ経験を、学外のスポーツクラブ経験は6.5%の計72.8%がスポーツを経験していた。中学校では、学校でのスポーツ経験が70.1%、学外2.2%の計72.2%がスポーツを経験していた。高校でのスポーツ体験は、大幅に低下する傾向が見られ49.5%、学外スポーツ経験も含めても51.1%であった。

こうした青年期のスポーツ離れは、わが国の傾向にとどまらず、スポーツ立国、アメリカにおいてもそうした傾向がみられ、その対策について様々な検討、提案がなされている。井谷⁶⁾は、アメリカの現状と取り組みについて、「子供たちの成長に伴って運動への参加が急激に減少しており、12才から13歳では69%が日常的に活発な運動に参加しているのに対して、18才から21才では38%にすぎない。大学における取り組みについては、多くは体育離れを生み出した従来の体力づくりによって結果的に体力が高まった状態を示している」そして、さらに、アメリカの新しいフィットネス教育の役割について、「各個人が楽しみながら生涯に渡って実践できる活動を見つけ出す第三段階。自分の体力状態を評価し、現在の活動を批判的に検討する能力を育てる第四段階が示されている。最終的な段階は、フィットネスに関する溢れるような情報を正しく判断し、取捨選択する力を養い、問題解決能力を高めることを目標とするものである」ことを報告している。すなわち、わが国においても体育・スポーツの伝統的な学校体育授業のあり方を再考し、生活の質(QOL)、健康、そして生涯スポーツをどのように捉え、実践していく能力や動機づけなどの啓発的指導展開を心がけていかなければならないと考える。

3) スポーツへの関心とスポーツ経験との関連

嘉戸⁴⁾の報告では、「スポーツが好きな高校生は、中学時代までスポーツクラブに所属していた経験を有する」と述べていた。そこで、本学女子学生のスポーツへの関心がスポーツ経験によるものかを検証するためスポーツへの関心の有無の回答と、各学齢期のスポーツ経験を説明要因とした横計が基数である2要因2条件のクロス集計表を作成した。そして、 χ^2 検定(独立性)によって人数の偏りを求めた。さらに、有意差のみとめられた項目については ϕ 係数を算出し関連の強さをみた。なお、このクロス表はスポーツへの関心が「ない」と「どちらでもない」の観測度数を併せ「ない」とした。つまり、「ある」とその他の回答を比較するためとした。また、学校でのスポーツ経験はその時期にスポーツ体験があったかどうかを問題にするため学外で行っていたスポーツ活動も含めた観測度数を用いた。

さて、まず、スポーツへの関心の有無と小学校・中学校・高校でのスポーツ活動の有無との関連性を比較検討した。それが表－2である。その結果、スポーツへの関心の有無と小学校・中学校・高校でのスポーツ活動の有無との間には人数の偏りに有意な差($P<0.01$)が認められた。すなわち、スポーツの経験者ほどスポーツへの関心が高い傾向を示している。そこで、 ϕ 係数を算出し連関の強さをみた。すると、スポーツへの関心と中学校でのスポーツ体験との連関係数は0.400で中程度の連関の強さがあった。また、小学校と高校との間での連関係数は0.204～0.262であり、僅かながら連関がみられた。つまり、スポーツへの関心があると回答した女子学生は、中学校時代のスポーツ経験の有無が関与していることが示唆され、嘉戸らの報告と同様な傾向が得られた。中学校でのスポーツ経験は、学外でのスポーツ経験を除けばその多くが体育授業や、自主的な活動である運動部である。そして、この経験は、彼らにとって遊びとしての範囲から、本格的なスポーツ体験の場として重要な機会であることが推察される。また、日本体育協会スポーツ医科学研究報告第2報⁷⁾によれば、「スポーツクラブ参加者のスポーツ観について、仲間との交流志向がもっとも高い」と報告がされている。つまり、友人、仲間づくりにスポーツが重要なファクターとして存在していることを考えれば、スポーツへの関心がこの期に大きな影響を与えたと推察することができる。

表－2 スポーツへの関心の有無とスポーツ体験の有無との関連

		スポーツの関心		χ^2 値
		ある	ない	
小学校スポーツ体験	あ る (度数)	113	21	** 12.66
	%	84.3	15.7	
	な い (度数)	31	19	
	%	62.0	38.0	
中学校スポーツ体験	あ る (度数)	117	16	** 29.59
	%	88.0	12.0	
	な い (度数)	27	24	
	%	52.9	47.1	
高校スポーツ体験	あ る (度数)	81	13	** 7.67
	%	86.2	13.8	
	な い (度数)	66	28	
	%	70.2	29.8	

**: $p<0.01$

4) スポーツへの関心と生涯スポーツ・体育・スポーツ授業への期待

これまで女子学生のスポーツへの関心の程度および発達過程において、スポーツへの関心度がどのような要因で形成され・変容されるか検討してきた。そして、女子学生はスポーツへの関心が高く、その関心は特に中学時代のスポーツ体験によるものが少なからず関与し

ていることが示唆された。そこで、ここでは、スポーツへの関心が生涯スポーツとして、今後の個人のライフワークにどのように関わっていくのか、また、生涯スポーツへ発展すべく現在の体育・スポーツ授業へどのような期待感を持っているかを検討し考察を進めることにする。

スポーツへの関心と生涯スポーツへの関心および体育・スポーツ授業への期待との関連性をクロス集計にて比較したのが表―3である。そして、 χ^2 検定（独立性）によって人数の偏りを求めた。いずれの項目においても有意な人数の偏りがみられた($P<0.01$)。そこで、 ϕ 係数を算出し連関の強さをみた。すると、スポーツへの関心と生涯スポーツへの関心との連関係数は0.600で強い連関があった。また、体育・スポーツ授業への関心との連関係数は0.410であり、中程度の連関の強さが見られた。すなわち、スポーツへの関心があると回答したものが、生涯スポーツ、体育・スポーツ授業への期待に強い関連性がみられた。

表―3 スポーツへの関心の有無と生涯スポーツ、体育授業への期待の関連

		スポーツへの関心		χ^2 値	
		ある	ない		
生涯スポーツの関心	あ	る (度数)	131	15	**
		%	90.0	10.0	66.55
	な	い (度数)	13	25	
		%	34.0	66.0	
体育授業への期待	あ	る (度数)	136	30	**
		%	81.9	18.1	30.22
	な	い (度数)	8	10	
		%	44.4	55.6	

**: $p<0.01$

スポーツへの関心は学齢期でのスポーツ経験によるところが要因として理解されたが、さらに、そうしたスポーツの関心が生涯スポーツへの関心につながる大きな要因であることが理解された。すなわち、学校でのスポーツ活動や経験は、生涯スポーツへの関心を育む傾向にあると理解することができる。このことは、スポーツを単に競争的遊戯として捉えることだけではなく、スポーツの文化的側面、すなわち、スポーツの価値観や心身に与える効果についても経験的に学んでいるのではないかと思われる。また、スポーツへの関心は大学体育・スポーツ授業への期待の要因として認められた。高校での一時的なスポーツからの離脱は、大学入学と同時にスポーツへの再参加、意欲の現われとして、体育・スポーツ授業に期待をよせているのではないだろうか。表1に示した、体育・スポーツ授業期待していると回答した者が90.2%の高い値を示している点からも推察できる。そして、その期待している内容については、楽しさ(41.0%)、新しいスポーツ体験(26.2%)、触れ合い(15.2%)、体力向上(12.7%)、技術向上(3.9%)を上げ、競技性の高いスポーツよりも、むしろ生涯スポーツにつ

ながるスポーツ指向を求めているものと推察することができる。そうした事実をふまえ、今後共、女子学生のスポーツ指向に対して、どのように応えていくか体育・スポーツ授業展開の検討を重ねていかなければならないと考える。

(2) 心身の自己認識感と体育・スポーツ授業

運動やスポーツ活動は実施者の自主性や意欲に頼らなければならない。体を動かす、プレーする、スポーツをするなどの目的は多種多様であっても、結局は意志力や向上心を持ち合わせていなければ成り立たないのである。そうした活動の結果が副次的に健康的な生活であったり、喜びであったり、生きがいであったりする。そうした高次の目標への橋渡しが大学体育に与えられた重要な指導の一つの側面と考えられる。と同時に、運動実施者である学生自身が現状の心身の状態、認識について強い関心と興味を覚えなければならない。なぜならば、先述した運動やスポーツは、実施者の自主性や意欲を基本としているからである。そこで、ここでは、学生自身の心身の自己認識感と体育・スポーツ授業との関連について検討し考察を進めることにする。

1) 運動不足感と体育・スポーツ授業

表—1に示すように、運動不足感を「ある」と回答した学生が155件(84.2%)、「ない」と回答した学生が16件(8.7%)、「どちらでもない」と回答した学生が13件(7.1%)であった。また、体育・スポーツ授業は運動不足を補うと「思う」と回答した学生が100件(54.4%)、「思わない」と回答した学生が32件(17.4%)、「どちらでもない」と回答した学生が52件(28.3%)であった。そこで、運動不足感と体育・スポーツ授業は運動不足を補うとの関連を見た。それが表—4である。その結果、有意な人数の偏りは認められなかった。しかし、表1に示すように、運動不足の認識感は84.2%の高い値を示している状況の中で、体育・スポーツ授業が運動不足を補っていないとの回答の傾向は、指導内容、展開、方法等の指導体系を再考してみる必要があると考えられる。と同時に、運動への欲求の充足は、単に、そうした授業展開上の課題でもないと思われる。すなわち、多数形式で行われる現状の授業形態の中では学生一人一人の運動活動量に限界が生じてきていることが予測される。適正な運動量の確保は、教科特性を考慮した小人数教育を理想としながら、学生自身の自主的な運動やスポーツへの参加を啓発していかなければならないと考える

表—4 動不足と体育授業との関連

		運動不足感		χ^2 値
		ある	ない	
体育授業は運動不足を補う	思　　う (度数)	84	16	0.009 n.s
	％	84.0	16.0	
	思わない (度数)	71	13	
	％	84.5	15.5	

2) ストレス感と体育・スポーツ授業

表一1に示すように、日常ストレス感を「ある」と回答した学生が85件(46.2%)、「ない」と回答した学生が47件(25.5%)、「どちらでもない」と回答した学生が52件(28.3%)であった。また、体育授業は気分転換になりますかに「思う」と回答した学生が122件(66.3%)、「思わない」と回答した学生が20件(10.9%)、「どちらでもない」と回答した学生が42件(22.8%)であった。そこで、ストレス感と体育・スポーツ授業は気分転換になるとの関連性をみた。それが表一5である。その結果、有意な人数の偏りは認められなかった。ただし、ストレスを感じない回答した99名の内、70名(70.7%)が体育・スポーツ授業は気分転換になると答えている。ということは、ストレス感の有無に関わらず体育・スポーツ授業は気分転換になると評価されていることが示唆されよう。

表一5 ストレス感と体育授業との関連

		ストレス感		χ^2 値
		ある	ない	
体育授業は気分転換になる	思　　う (度数)	52	70	2.251 n.s
	%	42.6	57.4	
	思わない (度数)	33	29	
	%	53.2	46.8	

ところで、アメリカの心理学者ラザルス(R, S, Lazarus)⁸⁾はストレスとなるストレッサーがどの程度自分自身にとって脅威的であるのか、または、知覚された脅威にどう対処すれば良いかを判断する認知的評価の重要性を指摘している。すなわち、同じストレッサーでも個人の認知評価の違いでストレス反応の現われ方が異なるのである。すると、ストレス感とは、主観的なものであり極めて個人差が大きく関与するものと考えられる。したがって、本調査で尋ねたストレス感も主観的評価であったといえる。本調査では、ストレス感を感じている、もしくは、感じていないと答えた女子学生の客観的ストレスについては明らかにできない。

また、橋本ら⁹⁾の報告では「快適自己ペースのランニングでは、ランニング後の感情に〔快感情〕と〔リラックス感情〕を示すことがある。これは、運動によって感情に改善がみられたのである。このことは、運動が直接ストレスを低減するのではなく、運動後の感情の改善が媒介となり、ストレスを低減すると考えられる」と述べている。つまり、橋本らの報告は運動やスポーツを楽しむことで、ストレスを低減する可能性があることを示唆するものである。このように、運動やスポーツはストレスの低減に関与していることを踏まえると、今後、ストレス感を客観的に評価して、ストレス群が体育・スポーツ授業に参加することによって感情がどのように変化するかを検討する調査が望まれる。

3) 体力不足感と体育・スポーツ授業

表一1に示したように、体力不足感を「ある」と回答した学生が164件(89.1%)、「ない」と回答した学生が5件(2.7%)、「どちらでもない」と回答した学生が15件(8.2%)であった。また、体育授業は体力不足を補うかに「思う」と回答した学生が57件(31.0%)、「思わない」と回答した学生が53件(28.8%)、「どちらでもない」と回答した学生が74件(40.2%)であった。そこで、体力不足感と体育・スポーツ授業は体力不足を補うとの関連性をみた。それが表6である。その結果、有意な人数の偏りが認められた($P<0.01$)そこで、連関係数をみると0.229であり、僅かながら連関が認められた。

表一6 体力不足感と体育授業との関連

		体力不足感		χ^2 値
		ある	ない	
体育授業は体力養成を補う	思う (度数)	56	1	** 9.672
	%	94.8	1.8	
	思わない (度数)	108	19	
	%	85.0	15.0	

**: $p<0.01$

ところで、体力の定義は、「広義の解釈では、人間活動の基礎をなす身体的および精神的能力である。さらに、体力の二面性については防衛体力と行動体力と分け理解されている」¹⁰⁾と定義されている。さらに、体力を理解するには、健康を維持するための身体内外への積極的な運動刺激の働きかけによって得られる心身の機能、能力の回復、改善のであるといえる。本調査の対象となった女子学生は、体育・スポーツ授業に対して体力不足、体力回復、さらにそうした傾向に対して自己認識と運動への欲求について考える傾向があると推察される。しかし、現実の学生の積極的な運動参加の志向にはやや疑問を呈するところである。とはいえ、健康、体力そして身体活動に対する積極的志向の啓発的な授業展開を、引き続き継続していかなければならないと考える。

4) 運動・スポーツの器用感と体育・スポーツ授業

表一1に示すように、運動・スポーツにおける器用感を「ある」と回答した学生が51件(27.7%)、「ない」と回答した学生が78件(42.4%)、「どちらでもない」と回答した学生が55件(22.9%)であった。また、体育授業は技術向上を補うと「思う」と回答した学生が68件(37.0%)、「思わない」と回答した学生が61件(33.2%)、「どちらでもない」と回答した学生が55件(29.9%)であった。そこで、この器用感と体育・スポーツ授業に器用さが役立つとの関連をみた。それが表一7である。その結果、有意な人数の偏りは認められなかった。運動やスポーツは状況に応じた判断や行動が大切な要素になる。そうした身のこなしは、スポーツの楽しさやプレーの喜び、さらに充実感や連帯感などを増加させる1つのスパイスとして考

えられる。しかし、多くの女子学生にとって運動やスポーツ特性に応じた身のこなし（判断と行動）には、多々、困惑気味の傾向がみられるが、体育・スポーツ授業に関しては、そうした技術向上への志向よりも、運動やスポーツそれ自体を経験し楽しみを優先しているものと思える。よって、運動やスポーツの器用感という身体能力は、それほど重要とは考えてはいないと推察される。また、本学部の1年次総合スポーツ授業形態は、多数のスポーツ種目の経験を重視する授業形態である。すなわち、1種目2回～3回の授業展開を試みていることによる、技術指導に制限がみられることもそうした傾向になるものと考え。今後は、体育・スポーツ授業改革後に、そうした点においても考慮していかなければならないと考える。

表―7 運動スポーツ技術の器用感と体育授業との関連

		器用な方だと		χ^2 値
		思う	思わない	
体育授業はそうした器用さに役立つと	思う (度数)	23	45	2.287
	%	33.8	66.2	
	思わない (度数)	28	88	n.s
	%	24.1	75.9	

5) 友人・仲間づくりと体育・スポーツ授業

表―1に示すように、友人・仲間づくりの苦手感が「ある」と回答した学生が27件(14.7%)、「ない」と回答した学生が99件(53.8%)、「どちらでもない」と回答している学生が58件(31.5%)であった。また、体育・スポーツ授業は友人・仲間づくりに役立つと「思う」と回答した学生が89件(48.4%)、「思わない」と回答した学生が31件(16.9%)、「どちらでもない」と回答している学生が64件(34.8%)であった。そこで、友人・仲間づくりが苦手と体育・スポーツ授業は友人・仲間づくりに役立つとの関連性をみた。それが表―8である。その結果、有意な人数の偏りは認められなかった。表1に示す単純集計においては、友人や仲間づくりが苦手であると回答している割合は14.7%と低い値であり、現実にはそうしたものへは抵抗感がないと思われるが、一方では、「苦手感」と「どちらともいえない」との回答を合わせるとその割合は46.2%となり、「苦手ではない」と回答した割合53.8%と同じくほぼ半数の値を示した。すなわち、本調査の女子学生の半数は、日常的には友人や仲間づくりについての抵抗感、非抵抗感は統計的には一般的な傾向を示しているものではないかと思われる。そうした傾向の中で、体育・スポーツ授業の人間相互作用についても期待感や効果を期待しない、あるいは、期待されていないという傾向が認められるのではないかと推察することができる。しかし、スポーツという非日常的な活動は、プレーを基本としながらプレイヤーの相互協力によって目標到達への楽しみ、喜びを共有するところに本質がある。体育・スポーツ授業の果たす役割は、そうした社会的機能において重要な教科と考える。藤原¹¹⁾は、集合意識とスポーツの可能性として、「スポーツは集団ひとりひとりに共通の場を与え、その事を通じて

集団に対する気持ちに影響を与えるからです。すなわち、スポーツは集合意識を呼び覚ますひとつのキであり、ひとりひとりに同質的な感情を味合わせる可能性を持っているとも言えます」と述べている。週に一度の体育・スポーツ授業において、そうした目標や教育的効果を求めるにはなお多くの課題があると考えるが、スポーツのもつ社会的機能の一つとしての相互作用への効果的な働きかけについては、今後共、授業内容、展開、方法についても十分配慮していかなければならないと考えられる。

表―8 友人・仲間づくりと体育授業との関連

		友人仲間づくりが苦手		χ^2 値
		思う	思わない	
体育授業は友人や仲間 づくりに	思　　う (度数)	10	79	1.805
	%	11.2	88.8	
	思わない (度数)	17	78	n.s
	%	17.9	82.1	

6) 生涯スポーツへの関心と体育・スポーツ授業

表―1 に示すように、生涯スポーツ感を「ある」と回答した学生が144件(78.3%)、「ない」と回答した学生が5件(2.7%)、「どちらでもない」と回答した学生が35件(19.0%)であった。また、体育・スポーツ授業が生涯スポーツに役立つかに「思う」と回答した学生が77件(41.9%)、「思わない」と回答した学生が36件(19.6%)、「どちらでもない」と回答している学生が71件(38.6%)であった。そこで、生涯スポーツへの関心と体育・スポーツ授業が生涯スポーツに役立つとの関連性をみた。それが表9である。その結果、有意な人数の偏りは認められた($P < 0.01$)。そこで、連関係数をみると0.289であり、僅かながら連関が認められた。スポーツを生涯に渡って親しみ、実践していく心は、健康生活、生活の質に欠くことのできない。高度成長を果たした今日の社会においては、まさにこうした点が多いに論議され、また、啓発されてきている。宇土¹²⁾は、「現代人の生きがいとスポーツについて、生きがいは文化によって左右され、それぞれの社会によって異なり、また、個人の特性によることも大きい」と指摘しているように、スポーツ文化の実践には個人差が大きいことが推察されるが、本調査結果は、生涯に渡って非日常的な運動やスポーツが評価されているものと示唆された。さらに、今日では健康と医療の観点からも、生涯に渡っての運動・スポーツに強い関心がもたれ始めている。そうした社会の傾向に対して大学体育に与えられた役割は、さらに重要な責務を負っているのではないかと考えられる。つまり、多くの学生にとって大学における運動やスポーツ活動実践の最終的な実践活動の場であるからである。そうした中で、女子学生の生涯スポーツへの関心が体育・スポーツ授業との関連性が認められことは、大学体育の果たす役割や機能について少なからず学生間に認知されているものではないかと考えられる。

表—9 生涯スポーツ感と体育授業との関連

		生涯スポーツへの関心		χ^2 値
		ある	ない	
体育授業は生涯スポーツに役立つ	思う (度数)	70	7	** 14.743
	%	90.9	9.1	
	思わない (度数)	74	33	
	%	69.2	30.8	

**: $p<0.01$

4. ま と め

本研究の目的にそって、1年次必修体育・スポーツ授業を受講している女子学生に対して、三つの視点からアンケート調査項目を設定し、調査を実施した。そして、それぞれについて観測値から、また、質問項目感の関連性をみるため、クロス集計表作成し χ^2 検定（独立性）を行い、それぞれの有意な人数の偏りを求めた結果から検討、考察を行ったが以下にまとめをみることができる。

(1) スポーツへの関心とスポーツ経験との関連

- 1) 本学部の女子学生のスポーツへの関心は非常に高い傾向がみられた。
- 2) さらに、スポーツへの関心とスポーツ経験との関連においては、小学校、中学校、高校それぞれに有意な人数の偏りが認められた。そのなかでも、中学校でのスポーツ経験が中程度の連関の強さが認められた。

(2) スポーツへの関心と生涯スポーツ、体育・スポーツ授業への期待

- 1) スポーツへの関心と生涯スポーツへの関心との関連では、有意な人数の偏りが見られ、その連関においても強い連関がみられた。
- 2) スポーツへの関心と体育・スポーツ授業への期待との関連でも、有意な人数の偏りが見られた。連関の強さは中程度であった。また、期待する内容については、楽しさ、新しいスポーツ体験、触れ合い、体力向上、技術向上それぞれの順で回答していた。

(3) 心身の自己認識感と体育・スポーツ授業との関連

- 1) 運動不足感と体育・スポーツ授業との関連では、有意な人数の偏りは認められなかった。週一回の授業では運動不足を補うことにはならない。また、授業内容・展開・方法、さらに受講人数との関連から、十分にそれらを補うだけものになっていないことが示唆される。
- 2) ストレス感と体育・スポーツ授業との関連では、有意な人数の偏りは認められなかった。しかし、気分転換になると回答した割合は70.7%を示していた。今後の検討課題としては、ストレス感を客観的に評価し、ストレス群が体育・スポーツ授業に参加することによって感情がどのように変化するのか検討することが望ましいと考える。

- 3) 体力不足感と体育・スポーツ授業との関連では、有意な人数の偏りは認められたが、その関連は僅かであった。運動不足感について84.2%の割合を示し、体力不足感では89.1%の割合を示していたが体育・スポーツ授業は体力不足感を補うとの関連では、少なからずとも身体活動の評価が認められたものと推察できるが、しかし、女子学生の運動と体力の関係については、今後の検討課題としたい。
- 4) 運動・スポーツへの器用感と体育・スポーツ授業との関連では、有意な人数の偏りは認められなかった。すなわち、楽しさ、新しいスポーツ体験、触れ合いであったり等の、学生間の相互作用を重視する傾向として体育・スポーツ授業を評価しているものと示唆されるのではないかと考える。
- 5) 友人・仲間づくりと体育・スポーツ授業との関連では、有意な人数の偏りは認められなかった。週一度の体育・スポーツではそうした関係を構築していくには否定的な回答とみることができるが、スポーツの社会的機能の一つでもある、人との相互作用をとうして進められるスポーツ場面では、重要な働きかけと思われるが、そうした期待感は認められなかった。
- 6) 生涯スポーツと体育・スポーツ授業との関連では、有意な人数の偏りが認められたが、その関連は僅かであった。とはいえ、体育・スポーツ授業が生涯に渡ってスポーツを楽しむ心や、実践していこうとする心に影響を及ぼしていることが認められる傾向を示唆しているものではないだろうか。大学体育に与えられた一つの使命として今後とも指導内容、展開、方法について検討を重ねていかなければならないと考える。

以上のように、スポーツへの関心とスポーツ経験、スポーツへの関心と生涯スポーツ、体育・スポーツ授業への期待、さらに心身の自己認識感と体育・スポーツ授業の関連について明らかにされた。高校でのスポーツからの離脱期は、多感な青年期の個性化や多様化によってその活動の場は制限されるものの、スポーツへの関心や生涯スポーツへの関心、そしてスポーツの実践について大学体育・スポーツ授業に期待や関心の高さがみられたものではないかと考える。

参考引用文献

- 1) 佐伯聰夫 (1995) : スポーツ文化としての「見るスポーツ」の意義、スポーツと健康、第一法規出版、Vol.27 No.9 P.9
- 2) 嘉戸 脩ら (1994) : 青少年のスポーツ生活、小学生のスポーツ生活、体育科教育、大修館書店 : 4月、p.66
- 3) 同上 : 青少年のスポーツ生活、中学生のスポーツ生活、体育科教育、大修館書店 : 5月、P.73
- 4) 同上 : 青少年のスポーツ生活、高校生のスポーツ生活、体育科教育、大修館書店 : 7月、P.77
- 5) 大橋美勝 (1995) : スポーツ部活いま何が問題化、体育科教育、大修館書店、5月号、P.14
- 6) 井谷恵子 (1998) : 大学体育に課せられたフィットネス教育の役割—アメリカにおける近年の状況から—、体育の科学、杏林書院 : Vol.48 P.475~P.479
- 7) 嘉戸 脩ら (1994) : 青少年のスポーツ参加に関する研究—第2報—日本体育協会スポーツ医科学研究報告、P.54
- 8) ラザルス、林峻一郎・訳 (1990) : ストレスとコーピング—ラザルス理論への招待、星和書院
- 9) 橋本公雄他 (1991) : 運動によるストレス低減に関する研究(2)—過性の快適自己ペース走による感情の変化、

九州大学健康センター、健康科学(13)

- 10) 藤原健固 (1995) : スポーツは役に立つか—その人間くささの社会学、成文堂選書23、
- 11) 宇戸正彦 (1988) : 教養としての保健体育、大修館書店、